

『ダゲレオタイプの女』——生の痕跡

黒沢清 (映画監督)

映画『ダゲレオタイプの女』(二〇一六年)には巨大なダゲレオタイプカメラが登場する。等身大写真に永遠の生を感じる写真家の前に、被写体だった妻の亡霊があらわれ、生と死の境界が次第にぼやけてゆく。黒沢清監督はなぜダゲレオタイプをテーマにしたのか。その着想を訊ねた。

——『ダゲレオタイプの女』の着想はどこから得たのでしょうか。

黒沢 一九九九年ごろ東京都写真美術館でたまたまダゲレオタイプ写真に出会ったことがきっかけです。二枚の写真が印象に残りました。一つは少女の肖像写真。目を見開いて、喜んでいのか怖がっているのかわからない奇妙な表情。解説文によると、ダゲレオタイプ初期の写真で、露光に一〇分間かかったそうです。一〇分間、絶対動いてはいけないと言われると、人間はこんな緊張感に満ちたなんとも言えない表情をするんだなあ、と。僕たちが日常目にする人の顔とはまったく違う。俳優に「こんな顔をして」と言っても、

まず無理だろうと思いましたね。

もう一つは、同じく長時間露光の写真で、町並みが克明に写っていますが無人なんです。人も馬車も何一つ写っていない。二分、三分という長時間露光だと、動かないものだけがくつきり写って、動いているものは写らない。当たり前のことなんです。現実には誰も目にできない景色でしょう。動いているものを「生きているもの」とすると、それがまったく写っていない町は「死の町」のよう。この二つの写真は「感銘を受けて、「生きている者と死んだ者との関係を表すストーリー」がでないかしら」と脚本を書きました。

——映画の中に亡くなった子どもの記念写真を撮るシーンがあります。写真には死者をこの世に留めておく意味があると思われませんか。

黒沢 そうですね、本物のダゲレオタイプの写真を手に取って見たときに、ズシッとした重さを感じたんです。百数十年前に生きていた人の姿が克明に金属板の上に刻まれていて、単に記録として残しているというレベルを超えて

て、かつて生きていた人の存在の断片がここに残ったんだと、軽々しく扱ってはいけないものだと感じました。

ダゲレオタイプが流行していた当時、フランスの作家・バルザックは、ダゲレオタイプによる撮影は、「物体を構成する層のひとつをはがして固定したものである」「物体は、撮影されるたびに別のものになり、『幻』のひとつ、すなわち物体を構成する本質の一部を確実に失う」と言っています(クエンティン・バジャック『写真の歴史』創元社)。やや文学的な表現ではありますが、当時の人は、この金属板に自分の像が移動したことで何かを取られてしまった感覚になるということが現物を見てよくわかりました。

——日本の「写真を撮られると魂を抜かれる」という迷信と似ていますね。映画では、写真家・ステファンがダゲレオタイプの写真について「存在そのものが銀板に固定される」と言っています。

黒沢 そのセリフは、まさにバルザックの言葉にヒントを得て書きました。

カシヤット撮られて魂を抜かれるというのはいささか実感がないのですが、金属板を見ると実感としてわかりました。——ステファンについて助手のジャンが「今は写真と現実を混同して、生者と死者を区別できない」と評するセリフもあります。幽霊と生きている人の間に写真というものがあるということですか。

黒沢 幽霊について真剣に考えを巡らせるのはなかなかやっかいですね。死そのものについても、例えば戦場だとしてもそれはまったく日常的な光景なのでしょうが、僕たちの今の生活の中では想像を絶する出来事です。死は現実なのかどうか。もし現実の一部だとしたら、写真に写ってもおかしくない。ただ、写真がほとんど現実にくっきりでありながら、現実そのものかというところどこ違うように感じる。「では僕らが現実だと思っているものは本当に現実なのか?」と迷うことは、日常の小さなレベルでもよく経験するんですよ。例えば海に行って「わあ、広い」と

写真を撮って、後から写真を見たら

まったく広くないということがよくあるでしょう? 自分が見た海と写真の海は全然違う。どちらが現実なのか。

「『広い』と感じたのはあなたがめったに海を見ないからそう思っただけ。一種の妄想である」と言われれば、写真のほうが見えなわけですよね。でも、ふだん見慣れた人であっても、写真で見ると実物とは違う感じがすることも珍しくありません。写真の中の「現実のようなもの」は、自分が現実だと思っているものと微妙に食い違っていて、どちらが現実かわからない。それを飛躍させれば、写真の中にふだん見えない死者がふと紛れ込むことは十分あり得る。そんなことを漠然と考えながら、このセリフが出てきたんだと思います。——写真の中の現実と自分が見た現実が異なるという話は、映画ではどうでしょう。頭に描いた映像と、撮った映像が違うものになってしまった経験はありますか。

黒沢 映画の話になると、またややこしい話になってくるんですけど、僕は



『ダゲレオタイプの女』に登場した、巨大ダゲレオタイプカメラのセット。奥行きのあるこの姿は映画の中では確認できない。貴重なカット。